



<論説>移行経済下のモンゴル国における農牧業

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 駿河, 輝和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00001364

移行経済下のモンゴル国における農牧業*

駿 河 輝 和

1、はじめに

モンゴルは1921年の独立当時、家畜の約35%は貴族や高僧が所有しており、遊牧民が支配層の所有する家畜を飼育していた。また牧畜業は完全な遊牧方式で行われていた。モンゴルが社会主義化を進めるにしたがい、領主や寺院からの財産没収に始まり、私的所有の制限や牧畜業の集団化は曲折を経ながらも徐々に強化されていったのである。家畜の公有化の促進とともに、国家調達制度が強化され、ネグデル（農牧業協同組合）はピラミド型に組織化された。ネグデルには生産大隊（ブリガード）の下に3家族以下で構成する生産隊（ソーリ）があった。モンゴルでは5畜（牛、馬、ラクダ、羊、山羊）が主として飼育されているが、伝統的な方式は様々な家畜を組み合わせて遊牧する複合放牧方式であった。しかし集団化により特定の家畜を遊牧する專業的放牧方式が一般的となつた。この專業的放牧方式は牧草利用の面から効率性には問題があった⁽¹⁾。

牧畜業の不振からシネチレル（モンゴル版ペレストロイカ）のもと、1987年に生産請負制度が導入され、1989年からは賃貸制度も普及し始めて一定の成果があがった。1989年12月には個人所有家畜枠拡大法が制定され、都市住民、牧民ともに私有できる家畜の頭数が増加し、1990年1月には家畜私有制限が撤廃された。1991年1月には民営化法が制定され、赤色（少額国家資産の入札用）と青色（規模の大きい国営企業の株式入札用）のバウチャーが配られた。家畜の購入にはどちらのバウチャーも使用することができた。1991年末にはほとんどのネグデルが民営化され、ネグデルは崩壊し、国家調達制度も1992年に廃止される。

牧畜業が私有化されるとともに、家畜の数は増加し、充分な家畜頭数をもつ遊牧民の生活は安定してくる。牧畜業の民営化はかなりの成功を収めている。

他方、小麦、ジャガイモ、野菜類の農作物生産は、畜産に比べるとウェイトは小さいが、

* 論文作成に当たり 1997 年度石田財団研究助成「モンゴルにおける持続的開発と環境保全のための学際的総合研究」(研究代表者・稻村哲也) より資金援助を受けた。記して感謝したい。

社会主義の下で生産量は拡大していた。モンゴル国の農耕は、寒さ、降水量の少なさ、表土の薄さなどの厳しい問題に面している。しかし穀物はもはや生活必需品になっており、農作物生産は今後のモンゴル国にとって重要な問題である。1950年代後半より農作物生産の増大の必要性が課題となり、大規模国営方式の農場が行われるようになる。牧畜はネグデルを中心であったのに対し、農作物は国営農場を中心であった。これにより農作物生産は拡大し、1980年代後半には小麦を輸出するまでになっている。しかし、1990年以降、市場経済化するにつれて耕地面積、農作物生産ともに激しく下落している⁽²⁾。

2. 統計データによる農牧業

表1は『1998年モンゴル国統計年報』より採った名目GDPの産業別構成比である。社会主義体制下で拡大した鉱工業のウエイトが、市場経済化とともに減少し始め1995年から96年にかけて急落している。逆に農業のウエイトが高くなっている。これは鉱工業生産が輸入品に押されたり旧社会主義諸国に輸出できなくなって激しく減少したのも一因であるが、もう一つには社会主義経済下では農牧業生産物の鉱工業生産物に対する相対価格が人為的に低く押さえられていたためである。市場経済になって農牧業生産物の相対価格が上昇して調整された結果、名目で見たGDP構成比率は高まった。商業は市場経済化後ウエイトが減少するが、1995年から増加に転じている。サービス業も1995年以降急速に上昇している。表2は、就業者構成比である。鉱工業は名目GDP構成比ほどではないが、市場経済化後ウエイトは減少している。しかし激しく減少したのは、名目GDPより早く1993年から1994年にかけてである。社会主義経済下で減少していた農業人口は増加に転じている。移行経済下にあって牧畜業が雇用の重要な受け皿になっている。輸送・通信は名目GDP比率、就業者比率ともに減っており、よく指摘される地方における輸送・通信サービスの低下を裏付けている。新しい商店、レストラン、バーなどが年々増加しているが、統計からも商業にたずさ

表1 名目GDPの構成比(%)

	工業	農業	建設	輸送	通信	商業	サービス	その他
1985	31.8	14.3	4.4	11.5	1.5	22.3	12.9	1.3
1988	32.2	14.6	6.3	11.4	1.6	18.3	14.6	1.1
1989	32.7	15.5	6.1	10.4	1.6	19.0	13.4	1.3
1990	35.6	15.2	5.0	10.2	1.8	19.4	11.5	1.2
1992	32.0	30.2	1.9	4.5	1.0	15.4	12.9	2.1
1993	30.9	35.1	1.6	3.2	1.4	16.0	16.0	2.3
1994	30.5	36.9	2.1	4.6	1.2	11.7	11.7	2.4
1995	32.4	36.7	2.7	3.4	1.2	12.3	12.3	0.1
1996	20.6	36.8	3.8	4.7	1.1	18.3	18.3	—
1997	20.4	34.5	3.4	4.4	1.1	21.8	21.8	—
1998	24.1	32.8	3.5	5.3	1.4	18.9	14.0	—

表2 就業者構成比 (%)

	鉱工業	農業	建設	輸送・通信	商業	その他
1960	12.1	60.8	6.9	3.7	3.5	13.0
1970	14.1	51.9	5.5	5.6	5.5	17.4
1980	16.6	39.3	6.3	7.2	6.7	23.9
1990	16.8	33.0	8.4	7.4	7.0	27.4
1992	16.6	36.5	5.1	6.2	6.7	28.9
1993	16.1	39.1	4.3	6.0	6.5	28.0
1994	12.8	42.8	3.5	4.0	8.6	28.3
1995	13.6	44.6	3.7	4.0	8.2	25.9
1996	13.2	45.2	3.8	4.0	8.7	25.1
1997	12.7	47.9	3.5	3.9	8.5	23.5
1998	12.2	48.7	3.4	4.1	9.2	22.5

表3 五畜数推移 (単位: 1,000頭)

	総計	ラクダ	馬	牛	羊	山羊
1918	9,646	229	1,151	1,078	5,700	1,488
1924	13,776	275	1,340	1,512	8,445	2,204
1930	23,676	481	1,567	1,887	15,660	4,081
1940	26,205	643	2,358	2,723	15,384	5,096
1950	22,702	844	2,317	1,988	12,575	5,979
1960	23,001	559	2,503	1,906	12,102	5,631
1970	22,575	624	2,318	2,108	13,312	4,204
1980	23,771	592	1,985	2,397	14,231	4,567
1985	22,486	559	1,971	2,408	13,246	4,299
1990	25,857	538	2,262	2,849	15,083	5,126
1991	25,528	476	2,259	2,822	14,721	5,250
1992	25,694	415	2,200	2,819	14,657	5,603
1993	25,173	367	2,190	2,730	13,779	6,107
1994	26,797	366	2,408	3,004	13,779	7,239
1995	28,571	368	2,648	3,316	13,718	8,520
1996	29,300	358	2,771	3,476	13,561	9,135
1997	31,292	355	2,893	3,613	14,166	10,265
1998	32,898	357	3,059	3,726	14,694	11,062

わる就業者の増加が見て取れる。

牧畜関係の統計を次ぎに検討する。表3は五畜の数の推移である。家畜総数は着実に増加している。家畜なかではラクダが減少し、羊はあまり増減がない。もっとも増加しているのは、山羊で1990年に比べると1997年では倍増している。馬や牛も1990年に比べて1997年では3割弱増加している。山羊はカシミヤの毛が高く売れることや、子供がたくさん産まれて増やしやすいこと、肉が羊ほどは好まれないことなどが原因で増加している。

表4は私的所有家畜数別家計数の推移である。この数字には専業の遊牧民と副業的に家畜を飼っている家計の両方が含まれている。1997年では専業・副業含めた家畜所有家計は約28万世帯であり、その内牧畜を主とする家計は約18万世帯である。したがって約10万世帯は副次的に家畜を所有していることになる。国際協力事業団(1997)では、家畜を200頭以上所有すれば多少とも余裕のある経営が可能で、100頭に満たなければ貧しい層、10頭未満

は極貧層としている。表4より100頭以上所有する家計が年々増えており、50頭以下の家計は年々減少して徐々に豊かな家計が増えてきていることを示している。しかし200頭以上所有している家計は1997年で約4万世帯、100頭以上になると10万4千世帯である。所有頭数の多い方を牧畜を主とする家計とすると、50頭以上所有している家計は16万8千であり、残りの1万5千世帯が50頭以下の貧しい層となる。遊牧民は他の遊牧民、企業、家畜所有者などから家畜を預かって自分の家畜と一緒に飼育して一定の収入を得ているケースもよくある。

農作物関連の統計を次ぎに見てみよう。表5には作付け面積の推移、表6に収穫高の推移がまとめてある。作付け面積で見ると、1989年まで社会主義経済下で穀物を中心に着実に

表4 私的所有家畜数別家計数（遊牧民と家畜所有家計を含む）

	1990	1992	1994	1996	1997	1998
10以下	76,437	58,901	46,772	39,778	35,530	31,668
11-30	88,035	69,223	53,766	47,080	41,009	36,837
31-50	42,047	50,204	42,007	37,462	34,784	33,733
51-100	42,548	66,280	62,947	61,464	63,774	62,941
101-200	10,714	42,763	53,160	55,383	65,282	67,466
201-500	492	13,718	28,249	32,983	34,539	36,275
501-999	-	378	2,123	3,678	4,137	5,112
1000-1499	-	7	137	445	531	860
1500-2000	-	-	4	32	54	62
2001以上	-	-	3	10	14	33
合計	260,873	301,474	289,168	278,315	279,654	274,987
遊牧民家計数	74,710	143,440	167,260	170,084	183,636	187,147
私的所有家畜数 (千頭)	8242.9	18081.1	24527.2	27365.2	29529.0	31,356

表5 作付面積（単位：1,000ヘクタール）

	総面積	穀物	ジャガイモ	野菜	飼料用作物
1960	265.5	246.7	2.2	0.8	15.8
1970	454.6	419.5	2.9	1.4	30.8
1980	704.0	557.5	7.4	2.4	136.7
1985	789.6	636.2	10.3	3.3	139.8
1986	803.7	629.7	11.2	3.8	159.0
1987	800.1	622.9	12.4	4.0	160.8
1988	828.1	641.6	13.2	4.1	169.2
1989	837.9	673.4	12.6	4.2	147.7
1990	787.7	654.1	12.2	3.6	117.8
1991	708.4	615.3	10.1	2.8	79.9
1992	657.7	592.6	8.7	2.2	52.9
1993	584.8	546.4	8.9	3.1	25.6
1994	470.6	449.1	7.8	2.7	10.9
1995	372.6	365.5	6.2	3.2	6.0
1996	347.8	332.6	6.9	3.2	4.3
1997	333.8	316.9	6.6	4.3	4.7
1998	326.6	306.9	8.1	5.5	4.9

表6 農作物収穫高（単位：1,000t）

	穀物総計	うち小麦	ジャガイモ	野菜
1980	286.8	229.8	39.3	26.0
1983	812.8	647.6	97.5	34.3
1984	586.2	458.7	122.9	34.2
1985	886.0	688.5	113.9	41.2
1986	869.4	663.7	132.8	46.4
1987	689.3	543.0	147.6	48.0
1988	814.3	672.2	103.2	56.3
1989	839.1	686.9	155.5	59.5
1990	718.3	596.2	131.1	41.7
1991	595.0	538.2	97.5	23.3
1992	493.9	453.2	78.5	16.4
1993	480.0	450.2	60.0	22.6
1994	330.7	321.9	54.0	22.8
1995	261.4	256.7	52.0	27.3
1996	220.1	215.3	46.0	23.8
1997	240.4	237.7	54.6	34.0
1998	194.9	191.8	65.2	45.7
年平均				
1961-1965	302.0	268.6	21.3	12.7
1966-1970	278.6	242.7	20.1	11.4
1971-1975	410.7	323.5	25.5	18.0
1976-1980	376.9	289.2	47.9	23.3
1981-1985	658.4	506.4	90.6	35.2
1986-1990	786.1	632.5	134.0	50.4
1991-1995	432.2	404.0	57.6	22.5
1996-1998	218.5	214.9	55.3	34.5

増加していることが分かる。収穫高は気候の影響もあるため上下動があるが、増加基調であったことに変わりはない。しかし1989年以降、野菜の作付け面積が回復しているのを除くと全ての作物で作付け面積が年々減少している。1997年と1989年を比較すると、穀物で47.1%、ジャガイモ53.2%とほぼ半分にまで減少しており、飼料用作物に至ってはわずか3.2%にまで落ち込んでいる。収穫高の落ち込みは作付け面積以上にひどい。穀物は28.6%、ジャガイモは35.1%であり、野菜も作付け面積は1989年時点まで回復しているのにも関わらず、収穫高は57.1%に回復するに留まっている。収穫高の落ち込みの方が激しいのは、トラクターなどの大型機械の減少や肥料が購入できないために土地の生産性が落ちているためと考えられる。作付け面積が減少しているのは、金融制度がうまく働かず種を購入する資金を銀行から借りることが困難であることも一因となっている。

3、ソム中心と遊牧民からの聞き取り調査

ウランバートル近郊のバヤンツォクト・ソム中心の役所での聞き取り結果とバヤンツォクト・ソムの牧民ナイダンスレン氏やドンドゴビ県の数人の牧民からの聞き取り調査結果をこ

の節ではにまとめている。

3-1、バヤンツォクト・ソム

首都ウランバートルの西北西約 100 キロメートルに位置している首都近郊のソムである。この地域は、従来小麦やジャガイモなど農作物生産が盛んであった。このソム中心の役場を 1996 年 8 月と 1998 年 8 月に訪問して役場の幹部の人に話を聞いた。1998 年のときは、ソムの NO. 2 である副ソム長のチョロンバット氏より話を聞いた。チョロンバット氏は役場の台帳を見ながら答えてくれたので数字は信頼が置ける。1997 年時点では人口 3,611 人、戸数 840 軒である。稻村・古川・エンクチュルーン（1995）も同じソムを 1993 年時点で調査しているが、その時の人口は約 4,200 人、戸数 986 軒であるから 4 年間で人口・戸数ともにかなり減少している。ソム中心の人口は 1,826 人。公務員は全部で 118 人。役所に勤務しているのが 14 人。学校勤務が 51 人。その内先生は 26 人。生徒数は、昨年 586 人で今年は 611 人とのこと。幼稚園勤務は 8 人で、その内先生は 3 人。病院勤務 19 人、図書館など文化センター勤務 3 人、警察 2 人、環境保守担当 5 人、ソムの下位行政単位バグの長が 4 人となっている。環境保守担当は、木の無断伐採、動物殺しの取り締まりを担当している。バグ長は以前は 8 人いたが 4 人に減っている。また獣医 4 人、郵便局員 2 人、銀行員（農業銀行）2 人いる。公務サービス会社があり、掃除や暖房の仕事をしているが、この会社に 28 人働いている。電気は線がウランバートルとつながっていてウランバートルから送られてくる。

ソムの収入は、30%が自らの税金収入であり、残り 70%は県からくる。農業に関しては土地を税金対象にしている。土地を 3 種類に分けて、1ha 当たり 400 トグリグ、600 トグリグ、1,200 トグリグの税金を徴収する。小麦用の土地は税金が安く、野菜用の土地は高い。家畜は、羊や山羊の小家畜 1 頭を基準にして牛や馬の大家畜は 1 頭を小家畜 2 頭分と計算する。合計 150 頭まで無税。150 頭を超える頭数に対して 1 頭当たり 150 トグリグの税金がかかる。車に対しては、1 台当たり 4 万トグリグの課税である。以前は車は少なかったがトラクターが 70 台あった。民営化後トラクターは売却されて台数が減ったが、乗用車の数は年々増えている。昨年は 32 台であったが、今年は春の段階で 72 台になっていた。ソムの昨年の税収入は 2,600 万トグリグ、97 年の予算は 9,600 万トグリグ、98 年の予算は 19,000 万トグリグであった。教育、病院、健康保険に主として支出している。

家畜の数は、ウランバートルの会社などの所有でソムの人達が預かっているものを含めると約 7 万頭。ソムの人達の所有数は約 5 万頭で、会社などから預かっている家畜が 2 万頭となる。ソムの人達所有の家畜内訳は次のようにになっている。ただし括弧の中は 1990 年における家畜の数である。ラクダ 12 頭（8 頭）、馬 5,501 頭（4,029 頭）、牛 5,562 頭（5,890 頭）、山羊 7,766 頭（570 頭）、羊 31,050 頭（34,424 頭）である。他の家畜の数はそれほど変わっ

ていないのに対し、山羊の数が極端に増えていることが分かる。羊は売ったり食べたりするので増加しない。山羊はカシミヤの毛がとれるのと、双子や三つ子で生まれてくるので増えやすい。ソムにある 840 軒の内 623 軒が家畜を所有している。

稻村・古川・エンクチュルーン（1995）によると、この地域には 1961 年から 91 年までバヤンツォクト国営農場があった。国営農場は、13 のブリガードで構成されていた。その内、9 つが農業ブリガード、3 つはミルク・ブリガード、1 つは牧畜ブリガードである。3 つのミルク・ブリガードはそれぞれ 800 頭から 1,000 頭の乳牛を保有し、牧畜ブリガードは約 3 万頭の家畜を保有していた。1991 年 4 月 1 日に国営農場は解体され、1993 年 8 月頃までには、3 つの大カンパニー（株式会社）、7 つの小カンパニー（有限会社）、5 つのホルショ－（ネグデルとは異なる協同組合）、約 50 の個人企業が成立していた。3 つの大カンパニーはミルク・ブリガードが改組されたもので、小カンパニーはその他のブリガードが改組されたものであった。ホルショ－は国営農場の資産の一部をバウチャーで購入して 15 人から 25 人で経営されている農場である。農耕もやると同時に家畜も所有している。個人企業は主として野菜を栽培する個人経営の自作農であった。

1996 年の夏の段階では、3 つの大カンパニーの内、1 社はウランバートルの会社が買収して稼働はしていなかった。もう 1 社は焼き肉の花正が買い取って肉牛を育てる計画があった。しかしこの計画は後に立ち消えになる。1 社だけが残って操業していたが、経営はうまく行ってなかった。この会社は乳牛を 100 頭所有していたが、民営化して後借金を抱えているとのことであった。会社法の改正によって、ホルショ－はなくなり、個人企業も企業でなくなっていた。個人農場では生産性が上がらないため、個人農場が集まって 2 つのカンパニーが生まれた。1996 年 5 月時点で 19 のカンパニーが存在していた。小麦の作付け面積は急激に減少して 3 分の 1 以下にまでなっていた。銀行の金利が高く、自己資金でまかなえる範囲で作付けを行っているので、作付け面積は減少している。農業会社は小麦を主としてウランバートルの小麦工場に売り、その他の产品は自由市場で売っている。灌漑設備は以前 2 つほどあったが、コストが高くつくので使用をやめていた。川の流れを野菜を作っている地所まで引いて利用しているとのことであった。農業会社の場合、他のカンパニーに比べて利益に対する税金は 50% 安くなっている。牧畜会社が一つあるが、これは獣医や農業大学出身の特別の専門家を集めて、家畜の品質を高めることを目指した会社であった。品質の高い種オスを集めて、遊牧民に貸したり売ったりしていた。ただし品種改良といったことまではやっていなかった。従業員は 30 人。従業員は賃金をもらって、家族単位で遊牧をしている。羊を 3,000 頭所有していて、その内 300-400 頭は種羊である。種羊は特別の飼料で育てている。秋に種羊を一頭貸すと、賃貸料は羊一頭であった。馬は 200 頭所有。市場経済化の前に、品種を高めるためにこの会社は作られそのまま民営化した。貿易会社もあり、自分で町へ売り

に行けない遊牧民に代わって、毛や毛皮を売っている。

1998年8月段階では、一時は21社あったカンパニーが倒産により13社にまで減っていた。その内5社はうまく行っているが、8社は収穫が思わしくない状況である。大カンパニーは全て消滅しており、牧畜会社も1997年に倒産していた。牧畜会社は利益が出なくなったり、遊牧を任せていた人が食べたり売ってしまったという事件のため倒産した。農業面積は2万haあったものが1998年現在で7千haにまで減少している。小麦の生産量も、1990年の17,000トンから、93年7,000トン、94年6,000トン、97年には2,700トンにまで減少している。作付け面積は5,000ha。生産の減少の原因は、1996年時点と同じで、資金不足が主要要因となっている。利子が高くて借金できないため、種、ガソリン、肥料などが購入できず、作付け面積が減り生産性も上がらない。倒産した会社の社員は失業して、一部はウランバートルに移住している。ソム最大の会社はゴナという会社で、2,000haを超える面積で小麦を生産し、昨年の収穫高は1,400トンであった。今年は1,800トン生産の予定である。従業員は44人。農業会社全体で従業員は、昨年73人、今年は88人いる。小麦の製粉工場はまだ存在していて、個人でやっている。1日10トンの生産量である。以前は10数人働いていたが、現在は5人で操業している。以前は小麦粉が高かったが、現在は安い中国製が入ってきていている。昨年より小麦粉の輸入に税金がかからなくなったので、輸入品が安くなり、中国製品の輸入が増加している。商業会社フッフハンは1994年に設立され、従業員は3人。毛をウランバートルに行って売り、商品を買ってきてソムで売る。28人が個人商店をしているが、やっていることは、商業会社と同じである。商業をするためには、毎月5,000トグルグを支払い、利益の15%を税金として払う。

個人農業は主としてジャガイモや野菜などを作っている。農業を営んでいる家族数は、94年の35軒から、95年87軒、96年123軒、97年145軒、98年360軒と年々増加している。現在の耕地面積は50ha。20haでジャガイモを30haで野菜を作っている。農耕と同時に牧畜も行っている家族が多い。1軒当たり平均面積は0.15haである。ここ2、3年ジャガイモや野菜の生産が増加している。今年から「野菜革命」を政府がキャッチフレーズにしている。内容は、自分の食べる野菜は自分で作りましょうというものである。

遊牧民のソム外からの移住には、移住前に許可を受ける必要がある。移住後はこのソムに登録して税金を支払う。1997年度には、オブス県から15軒、ゴビアルタイ県から3軒、フブスグル県から2軒、アルハンガイ県から3軒、合計23軒の移住があった。外部からの移住は、1990年5軒、91年12軒、92年9軒、93年16軒、94年27軒、95年19軒、96年6軒であった。逆に、このソムからウランバートルへ移住した家族数は、1990年35軒、91年22軒、93年10軒、94年43軒、95年13軒、96年21軒、97年27軒、98年はすでに30軒は移動している。したがって、家族数は減少している。ザブハン、ゴビアルタイ、オブスと

いった県には大学がないので、子供が大学に行き出すと子供の近くにいたいのでウランバートルの近くに移住してくる。

登録している失業者は36人、しかし実際はもっと多い。登録しても仕事が見つからないので登録していない人が多い。会社が倒産した人で、仕事の見つからない人の数は、昨年351人、今年330人。ソム全体の人口が3,611人であり、その中には子供も含んでいるので、仕事の見つからない人の数は相当多い。

ウランバートルに近いため、タルバガン殺しや木の無断伐採が増えてきている。したがって、ソム会議で環境保守担当の公務員の数を1993年に決めた3人から5人に増やした。93年以前は1人であった。ソム会議は議員20人からなる。ソム会議がソム長を選ぶ。1992年10月と1996年10月に議員の選挙があった。4年ごとに選挙がある。

3-2、バヤンツォクト・ソムの牧民ナイダンスレン氏

ナイダンスレン氏は、1942年生まれ。1961年バヤンツォクトのネグデル専門学校を卒業し、1962年からバヤンツォクト国営農場に勤務、1990年までトラクターの運転手として働いた。1991年4月に国営農場が解体すると、クーポンで家畜を購入して、牧民となり遊牧を始めた。ただし、国営農場に勤務しているときから、個人家畜も飼っていた。

所有家畜数は、1990年末で、羊54頭、牛8頭、馬18頭、山羊0頭の合計80頭が、1993年には羊115頭、牛17頭、馬39頭、山羊1頭の合計172頭になっている。これは主としてクーポンによる家畜購入による増加である。その後も家畜は増え続け、概数ではあるが1997年夏では羊150-160頭、牛30頭、馬30頭、山羊29頭、合計240-250頭になり、1998年夏には羊200頭以上、牛30頭、馬50頭、山羊50頭、合計300頭ぐらいになっている。また元々新聞社から羊350頭ほど預かっていた。新聞社が羊を病院に売却したが、そのまま羊を預かっている。預かっている羊は、97年で310頭、98年で359頭である。病院から支払われる世話代は、97年で月15,000トグリグ、98年で月20,000トグリグである。

1997年から98年において現金収入は、病院の家畜の世話代年間18万から24万トグリグの他に次のようなものがある。カシミヤ毛は、1kg当たり1万から1万2千トグリグで一頭当たり250gとれる。今年は10kgとれた。したがって、収入は10-12万トグリグぐらいとなる。(昨年(1997年)は、1kg当たり1万トグリグで7-8kgとれた。) 羊毛は、1kg当たり200トグリグで、今年は150kgとれたとのことで、収入は3万トグリグぐらい。羊皮の売却は30-40頭分で、7月は7,000トグリグであったが8月現在では1枚5,000トグリグ。価格は季節によって変動するので正確には収入が推定できないが、15万から20万トグリグか。冬前に殺した羊の皮は春頃まとめて売却し、夏はすぐに売り払う。馬乳酒は生産量が少ないときは自家消費で終わり売らない。1年間で300-400リットル売り、昨年の価格はリッ

トル当たり 300 トグリグであった。馬乳酒の年間収入は 9-12 万トグリグになる。馬乳酒も価格の変動があり、ナーダム（夏の祭典）の前がリットル当たり 500 トグリグと高く、ナーダムの後は 300 トグリグにまで下がり、秋になると 400 トグリグまで回復する。ミルクはリットル当たり 200 トグリグで、去年も同じ価格であった。春は高く 500 トグリグで、夏は安くなる。100 リットルぐらい売った（年間か月間か不明）。年間 100 リットルとすると、2 万トグリグ見当となる。10 頭の羊をウランバートルから買いに来た人に売却。羊は雄が一頭 2 万から 2 万 5 千トグリグ、雌が 1 万 8 千トグリグである。10 頭であれば、一頭 2 万トグリグとして 20 万トグリグの収入になる⁽¹⁾。

以上合計すると、現金収入だけで 80 万トグリグになる。その上、肉、乳類、馬乳酒、チーズなどの乳製品は自己消費していて、自己消費分は現金収入を上回っていると予想される。私が 1998 年 7 月 4 日から 9 月 12 日まで訪問していたモンゴル市場経済研究所の研究員は、モンゴルの 1 流大学やロシア・東欧の大学出身者であるが、固定的な月収は 2 万トグリグでプロジェクト・翻訳などを行ったとき収入の半分が自分の収入になるシステムである。月収はせいぜい約 4 万トグリグと予想される。駿河（1999a）のように、訪問した製造大企業の平均月収は 4-5 万トグリグであり、年収は 48-60 万トグリグである。通常家庭は共稼ぎをしているとしても、この家計の豊かさが分かるであろう。

カシミヤ毛、羊毛、羊皮、馬乳酒、ミルクは、ウランバートルのハラホリン市場か食料品市場で売る。商品を持っていくと、バイヤーが近づいてきて買ってくれる。たいていは言い値で売ってしまい、交渉はしない。ミルクはアパートの前で売るとすぐに売れる。最近はこの方法がはやっている。私は、星映画館やプラハ・レストランの近くのアパートの 2 階に暮らしていたが、朝はミルクなどを売りに来た牧民の声で目覚めた。アパートの前のテーブルにミルクの缶を置きいすにすわっている牧民のところに、アパートの住人はミルク入れや鍋を持って行って計り買いをする。私も一度買ってみたかったが、結局買わずじまいとなった。毎日同じ牧民が来るわけではなく、日々違った牧民が来て売っているようであった。そのテーブルに 2 人の牧民がいることもしょっちゅうであった。

車の便は、ソム中心から 1 週間に 3 回バスが出ている（片道 700 トグリグ）。その他、ウランバートルに色々な車が行き来しているので、便乗して利用している。ウランバートルへ行って売るのは、1990 年頃からである。

現金は、服、家具、靴、小麦などを買うのに必要である。訪問したときは、子供が新学期を控えて靴が必要なため、馬乳酒を売ってお金を作ることであった。

冬雪が多いときには、家畜が何頭か死ぬ。死んだ家畜はまずいので食べない。泥棒と狼によって家畜が減るときもある。狼は弱っている品質の悪い家畜を殺すが、泥棒は品質の良いのをねらうので被害が大きい。1997 年 7 月の聞き取りでは、6 月半ばから 11 月半ばまで、

一頭の羊を2週間ぐらいで食べる。11月に馬一頭、牛一頭、羊5-6頭殺して冬に備え、4月から6月までは干した肉を食べることであった。我々が訪問するといつも羊を一頭殺して料理してくれる。そのときも、かなり羊を選別して殺しているようであった。

1997年と1998年に聞き取りした家畜の値段を最後に記しておく。単位は一頭当たりトグリグである。括弧内が1997年に聞いたときの価格である。

羊 雄	20,000-25,000	(20,000-30,000)
雌	18,000	(10,000-15,000)
山羊 雄	14,000-18,000	(12,000-13,000)
雌	15,000	(8,000-10,000)
牛 雄	200,000	(200,000)
雌	100,000	(80,000-100,000)
馬 食用	60,000-70,000	(30,000-60,000)
競馬用	-700万	

ナイダンスレンさんは、1996年にソムのナーダムで3位の馬を80万トグリグで売ったことがあるそうである。

3-3、ドンドゴビ

1998年8月12日地理学者、植物学者、文化人類学者、社会学者、経済学者（私のこと）の学際的研究プロジェクト・チームは、通訳や案内人などのモンゴル人とともにドンドゴビ県へと4台のロシア製ジープに分乗して出発した。出発当日急にロシアからガソリンが入ってこなくなり、ガソリン獲得のために大幅に出発時間が遅れるというアクシデントに見舞われた。出発が遅れた上に、同乗モンゴル人が勝手に馬乳酒用の缶を取りに家に帰ったり、1人の運転手が勝手にどんどん先に行ってはぐれたりという事件が起り、夜間走行するはめになった。統制のとれない運転手達を見て、あるモンゴル人は「モンゴルには240万人の小さなジンギス・ハーンがいる」といっていたが、その通りと実感した。結局、ドンドゴビ県の県庁都市マンダルゴビのホテルに到着したのは朝5時半頃であった。ホテルの従業員をたたき起こして、会議室にシュラフをひいてごろ寝した。翌日ぬかるみにジープが何度かはまりこむことなどが起こりつつも、ウルジート・ソム中心を通り抜けて、牧民のゲルを順番に訪ねた。その聞き取り調査の結果である。

(1) 元ブリガード長（ツェネン氏）の話

このソムには3つのブリガードがあった。一つは、ラクダを中心のブリガードで、ラクダ1万頭、羊と山羊6千頭、馬2、3千頭、牛はいなかった。もう一つは、羊と山羊を中心の

ブリガードであり、三つ目は、5畜のブリガードであった。民営化によって家畜は払い下げになった。その価格は次のようになっていた。ラクダ 2,500 トグリグ、牛 2,000 トグリグ、馬 1,500 トグリグ、山羊 150 トグリグ、羊 250 トグリグ。ブリガードの人とブリガード外のソムの人とでは払い下げ頭数に差を付けた。

ツェネン氏自身は、民営化前に自分の家畜を約 60 頭（ラクダ 2-3 頭、馬 20 頭、牛 10 頭、羊・山羊それぞれ 20 頭）所有していた。民営化で約 50 頭（ラクダ 18 頭、馬 7 頭、山羊 30 頭）購入した。民営化は 91 年に始まり、93 年には完全に私有化になった。92 年にはウランバートルが肉不足になり、ウランバートルからトラックで肉を買いに来た。

ソムの中心には、商業会社（ヘッスレー社）がある。従業員は 20 人ぐらい。その内運転手は 5-6 人。毛皮、毛、肉をウランバートルへ持って売っている。中国にも売っている。92-93 年頃から中国へ運んでいる。牧草を刈り取って、遊牧民に供給している。従業員の給料は 15,000-25,000 トグリグ。従業員は家畜を所有して、遊牧民に預けている。

(2) 牧民バヤルサイハン氏

義務教育の 8 年を終了。以前は大工の仕事を主としたネグデルの公務員であったが、数年前に牧民となる。奥さんは以前獣医であった。所有家畜数は、合計 113-114 頭（ラクダ 5-6 頭、羊 20 頭、山羊 60 頭、馬 20 頭、牛 8 頭）。牧民となって新しいので家畜の頭数は多くない。山羊は年間 25 頭増加している。子供は 5 人、1 人は義務教育を終えて嫁に行き、3 人は学校在籍中で、1 人はまだ学校に行っていない。

馬乳酒は自己消費にとどまり、山羊の毛が現金収入で 1kg 当たり 8,000-9,000 トグリグ。山羊の毛は 5 月にすきとるが、白が高く黒が安い。一頭から 270 g 取れる。羊毛は 1 kg 200 トグリグ。他に肉と羊皮が売れる。

子供の手伝いはだいたい次のようなものである。4 歳：ゲル付近の糞運び。5 歳：馬に乗って井戸へ行く。6-7 歳：遠くの燃料集め。8 歳：学校へ行く。夏休みの 3 ヶ月間家の手伝い。乳搾りや羊を草原につれて行く。9-10 歳：一人前に家畜の世話。

(3) バッターさん

娘と母子 2 人で暮らしている。家畜の数は、今年は合計 270 頭（馬 15 頭、牛 25 頭、羊 110 頭、山羊 120 頭、ラクダはいない）。

(4) フーフェニさん

18 歳の娘が 1 ヶ月の男の子を連れて里帰りしていた。娘と母子 2 人で暮らしている。バヤルサイハン氏の奥さんオウンツェツェクやバッターさんは、フーフェニさんの娘である。

家畜は合計 270 頭（ラクダ 50 頭、羊 60 頭、牛 10 頭、山羊 100 頭、馬 50 頭）。ラクダの数が多い。ラクダの毛は一頭から 4-6kg とれ、3 月から 5 月にかけて刈り取る。1kg 当たりの価格は、去年は 200-300 トグリグであったが今年は 1,000 トグリグである。バイクを売りに来た人があり、息子にバイクを買うため山羊と羊合計 15 頭、ラクダ 5 頭、馬 1 頭と交換した。小山羊は近所の人の群れと交換、母山羊は自分の子供にしか乳を飲ませないため、母山羊の乳が飲まれることがない。小山羊に乳を飲ませるときは母山羊を小山羊の所に連れていく。

(5) その他牧民達からの話

ウルジート・ソムあたりの家畜の値段。単位はトグリグ。

値段（トグリグ）一頭当たり肉の量 (kg)

羊	2.5 万-3 万	30
山羊	1.5 万	20
牛 雄	15 万	270
雌	10 万	
馬 食用	5 万	150
競馬	400 万	
ラクダ	15 万	400

ウランバートルでは、雄牛は 20-30 万トグリグ、ラクダは 20 万トグリグする。羊毛は自分のゲルのフェルトを作るために使用している。結婚すれば、新しいゲルが必要で、そのためにフェルトが必要である。山羊の毛はソム中心へ行って会社で商品と交換する。家畜を売るとき、ソム中心でトラックを持っている運転手を雇ってウランバートルまで運んで売る。何人かで共同でトラックを雇うこともある。1993 年頃からウランバートルへ売りに行っている。国家調達システムが崩壊後流通システムの崩壊がよく言及されるが、それなりの対応が徐々に出来てきている。

4. おわりに

モンゴル国の牧畜業は市場経済化とともに、社会主義体制の下での家畜公有制と専業的放牧方式から、家畜の私有化と複合放牧方式に変わった。家畜の公有制の下では、家畜を大切に育てて数を増やそうというインセンティブが弱く、家畜の数は増加しなかった。また専業的放牧方式では、牧草の効率的利用に問題があった。家畜が私有化されるとともに、山羊を中心として家畜の数が増加している。ただし、都会周辺に牧民が集中してきていることと、

山羊の比重が高くなっていることで、牧草への影響が懸念されている。トゥブ県バヤンツォクト・ソムとドンドゴビ県のウルジート・ソムの牧民から聞き取り調査をした。聞き取り調査をした牧民は、多くの家畜を所有していて豊かな層に属している。豊かな層は年々家畜数が増加し、毛、毛皮、肉、家畜、ミルク、馬乳酒の販売も自らウランバートルまで持ち込んで売るといった有利な方法も利用することが出来ている。

対して、農作物生産は、農業会社の運転資金の不足や気候の影響を受けやすいことなどから年々作付け面積も生産高も減少している。農業会社の倒産は多く、仕事を失って家畜も所有していない場合にはウランバートルに移動して仕事を探すしかないようである。

<注>

- (1) 各家畜の果たす役割については、小長谷（1997）参照。
- (2) 農牧部門の民営化の詳細については、二木（1993）、安田（1996）参照。その他、農牧部門に関する資料として、国際協力事業団（1997）がある。モンゴル国経済全体の推移や企業の動向については、駿河（1999a）（1999b）を参照されたい。

<参考文献>

- 二木博史（1993）「農業の基本構造と改革」青木信治編『変革下のモンゴル国経済』第3章、アジア経済研究所
稻村哲也・古川彰・エンクチュルーン（1995）「モンゴルにおける社会主義体制の終焉－経済・社会・文化の変動と環境問題－」『リトルワールド研究報告』第12号
国際協力事業団（1997）『国別援助検討会報告書：モンゴル』国際協力事業団
小長谷有紀（1997）『アジア読本：モンゴル』河出書房新社
駿河輝和（1999a）「移行経済下で変貌するモンゴル国の企業」未定稿
駿河輝和（1999b）「移行経済下のモンゴルの経済と企業」『世界経済評論』
安田 靖（1996）『モンゴル経済入門』日本評論社